

よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習

～「つながる」をキーワードにした指導を通して～

多治見市立小泉小学校 教諭 安藤 宜尚

概 要

本研究は、子どもたちに社会的事象に対する見方・考え方を習得させるための指導の在り方を追究し、実践した記録である。新しい時代に対応した新学習指導要領では、「何を知っているか」から「知っている知識や技能を用いて、何ができるようになるのか」といった、知識・技能の汎用性が重視されるようになった。社会科にあてはめて考えると、これは子どもたちが社会で起きている出来事に関心や問題意識を持ち、その出来事の価値や問題点を見付けたり、解決策を考えたりできるようになるだけではなく、さらにその解決策を実践しようとする態度まで育てるということである。このような姿は、子どもの意識が社会とつながるような授業の中で培うことができると考えた。子どもの意識が社会とつながるとは、社会的事象を自分に引き寄せて捉えるということである。そうなるためには、指導前の単元指導計画、教材づくり、学習活動、授業中の見届けなどの様々な段階で「つながる」をキーワードにした手立てが効果的であると考え、6年生の歴史分野の指導を通して実践に取り組んだ。子どもが資料や仲間の意見、既習内容をつなげながら、社会的事象に対する見方・考え方をつかんでいく様子に着目しながら本研究をまとめた。

1 はじめに

日本社会が今後直面する課題は、多岐にわたる。まずは少子高齢化の急速な進展と、それに伴う人口減少の問題。AI（人工知能）技術の急速な発展に伴い、現存する職業の半数以上がAIにとって代わられてしまうのではないかという問題。外国人労働者の受け入れ、企業のグローバル化のますますの進展、子育て支援、働き方改革（生産性改革）、環境問題など、対応しなくてはならない課題が目白押しである。

今後、この国を支えていくことになる子どもたちは、これらの大きな課題と産業構造の変化に対応していく力を付ける必要がある。そのために、子どもたちはたくさんの知識を学ぶことはもちろん必要なのだが、それは、ペーパーテストで点数を取るための知識ではなく、実社会の中での問題解決に寄与するような汎用性の高い知識・技能でなくてはならない。

新学習指導要領がこれまでの学習指導要領と比べても、画期的に変わったとされる。従来の学習指導要領が「何を知っている（ようにするの）か」といった指導内容に重点を置いて編纂されてきた

のが、新指導要領においては、「知っている知識や技能を用いて、何ができるようになるのか」といった、知識・技能の汎用性を重視している点にある。このことを、上智大学的那須正裕教授は「学校教育の守備範囲を知識・技能の習得に留めることなく、それらを初めて出合う問題場面で効果的に活用する思考力・判断力・表現力など汎用性のある認知スキルにまで高め、さらに粘り強く問題解決に取り組む意欲や自己調整能力、直面する対人関係の困難を乗り越える社会スキルの育成にまで拡充すること、すなわち学力論の大幅な拡張と刷新を否応なしに求める。」と説明している。

この議論が腑に落ちるためには、再度その議論の中心にある問題意識について考える必要がある。それは、産業革命以降の「産業社会（工業社会）」から、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」へと変化していくという将来予測である。この知識基盤社会では、「産業社会とは対照的に『正解』は存在せず、その状況における『最適解』をその都度自力で、あるいは多様な他者と協働して生み出す

べく、知識を豊かに創造し活用する資質・能力がすべての人に求められる」(那須氏) というのである。こうした知識基盤社会においては、「何を知っているか」ということよりも、「何ができるようになってきているのか」ということの方が重要という。そこで、学校教育で習得する知識が、表面的知識に収まることなく、より実社会・実生活の中で応用可能な汎用性の高い知識や技能にまで昇華していかなくてはならないという問題意識が浮かび上がってくる。

このことを社会科という教科にあてはめて考えてみる。「知識」という言葉を社会科という教科を通して眺めると、どうしても歴史用語、地理用語などの用語のイメージで捉えられがちである。あらゆる社会的事象には、それに付随する名前が付けてあるのだが、その膨大な量の名前を暗記することが社会科の学習だと思われがちである。よく言われる「社会科は暗記科目」などという表現はそれを見事に言い表したものである。しかし、社会科の教科の目標である「公民的資質・能力の育成」とは、そのような点の状態の知識を無数に詰め込むことでは絶対に達成することはできない。公民的資質・能力とは、社会的な見方・考え方を自在に働かせながら社会に存在する課題を捉えたり、その解決方法を考えたりしながら、よりよい社会の実現に向けて主体的に行動を起こしていく力のことである。

そのような公民的資質・能力はどのような学習活動を行えば習得することができるのだろうか。

一言で表すならば、「子どもが社会とつながるような授業を展開すること」であろう。子どもたちの意識が社会につながるためには、世の中で起きている出来事(社会的事象)を捉える見方・考え方が必要である。見方・考え方を働かせることによって、社会的事象に含まれる課題や価値に気付くことができたり、その解決方法についても自分なりに思考することができるようになったりする。

このような見方・考え方を育むためには、社会的事象を自分のこととして受け止め、自分と社会とのつながりを感じながらそれらを解決したり、これからの社会の在り方や社会への関わり方、自分の生き方を考えたりする活動のある授業が重要だと考える。このような学習を通して、急速な時

代の変化や身の回りにある社会の諸問題に適切に対応し、どの子ども主体的に社会に参画し、よりよい社会を実現するための資質・能力の育成が図られると考えた。そこで研究主題を「よりよい社会を実現するための資質・能力の育成～『つながる』をキーワードにした指導を通して～」と設定した。

2. 研究仮説

研究主題を踏まえ、本研究での仮説を次のように設定した。

「つながる」をキーワードにした指導の手立てを打つことで、子どもに社会的事象の見方・考え方が身に付き、社会的事象の意味を多角的に追究すると共に、よりよい社会の在り方について考え、自らの生き方につなげていく子が育つ。

3. 研究内容

以上の研究仮説を実証するために、研究内容を次の通りとした。

(研究内容1) つながるをキーワードにした教材化や単元構成の工夫

- ① 社会的事象を自分につなげて捉えることができる教材の開発。
- ② 身に付けさせたい社会的事象の見方・考え方を、位置付けた単元構造図の作成。

(研究内容2) 仲間や社会とつながる学習活動の工夫

- ① 既習事項、資料と資料、仲間の意見をつなげることで、社会的事象を多角的に考える学習活動。
- ② 社会的事象への自分の関わり方(つながり)を選択・判断する学習活動。

(研究内容3) 指導・援助の工夫

- ① 社会とのつながりに気付く「3つの見届け」
- ② 仲間の考えにつなげるための学習環境の工夫

4. 研究方法

研究方法については、次の通りとする。

(1) 研究対象

研究対象は担任する6年2組の児童33名(男子19名、女子14名)とする。

(2)「社会的事象の見方・考え方を働かせながら、社会的事象の意味を多角的に追究するとともに、よりよい社会の在り方について考え、自らの生き方につなげていく」姿を検証する方法。

検証方法は、次の2点とする。

- ①授業中の仲間同士の話し合いの様子。
- ②グループ交流におけるホワイトボードの記述や、個人追究やまとめにおけるノートの記述内容を分析する。

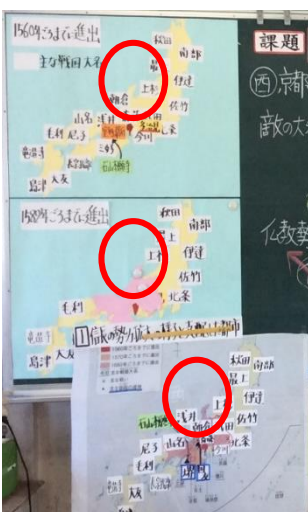
5. 実践

6月実施の「三人の武将と天下統一」、12月実施の「長く続いた戦争と人々の暮らし」の2つの単元での実践を具体例として取り上げ、児童の姿の変容を分析する。

(研究内容1)つながるをキーワードにした教材化や単元構成の工夫

①社会的事象を自分につなげて捉えることができる教材の開発。

6年生の社会科は歴史分野の授業が全体の約3分の2を占める。歴史分野における社会的事象は全て過去のことである。しかも、子どもたちが生まれる以前の話しかない。だから、子どもたちが歴史的な事象をより自分に引きつけて捉えることができるように、歴史的な事象と自分たちが生活する地域とのつながりを感じさせるような教材の開発に取り組んだ。



【図表1】歴史地図

「3人の武将と天下統一」の単元では、織田信長を紹介する際に、岐阜県の「岐阜」という名称を決めたのは織田信長であるというエピソードを織り交ぜることで教科書の中の人物ではなく、より自分に身近な人物であると感じられるようにした。

この他、信長が勢力を拡大していく様子は

図を使って視覚的に把握できるようにし、その中に必ず多治見市の位置を示すことで、自分たちの地域と歴史的な事象との間のつながりを自分に引き寄せてイメージできるようにした(図表1)。

また、居住する地域と3人の武将との関わりについても、単元の導入と終末で触れるようにした。本校が位置する多治見市小泉町・大原町のあたりは、戦国時代に武田家家臣の若尾一族が根本城主として治めていた。その後、織田信長が勢いを持つようになると、織田方の森可成の支配下となった。信長の死後、森可成は豊臣方となり、小牧・長久手の戦いでは若尾氏もこの森可成の配下として徳川軍と戦うが敗走。根本城主だった若尾甚九朗も戦死した。徳川の時代になると、若尾氏は帰農して家業に励んだという史実が残されている。こうした史実をもとに、単元終末の「ひろげる」段階において、3人の武将と若尾氏との関わりをつなげる活動を行うことにより、地域に残る史跡



【図表2】根本城の跡地や若尾氏のお墓

(図表2)とともに、自分たちの郷土への理解へとひろげるようにした。(図表3)

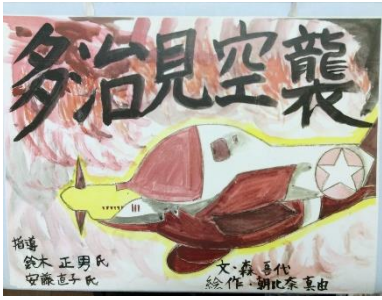
この他、12月の「長く続いた戦争と人々の暮らし」の単元では、太平洋戦争末期の「空襲」とその犠牲者が兵士だけではなく、広く一般の国民であったことを理解させるために多治見市空襲を取り上げた。教材には文・森善代、作・朝比奈真由氏の紙芝居「多治

自分の住んでいる地域の歴史を知ろう。
小泉地区(大原・根本)と戦国時代について

年	氏名(山内)	理由
1574年	大原・根本地区を中心としたこの地域の動き	この勢力か? 全図の動きは? ()の支配下
1574年	若尾氏は武田氏の家臣で、大原・根本に拠点を置いていた。武田氏に忠実に仕え、武田氏に代わって大原・根本を治めていた。武田氏に代わって大原・根本を治めていた。武田氏に代わって大原・根本を治めていた。	武田氏
1582年	織田信長が岐阜を平定し、大原・根本を支配した。織田信長が岐阜を平定し、大原・根本を支配した。織田信長が岐阜を平定し、大原・根本を支配した。	織田信長
1600年	小牧・長久手の戦い。若尾氏は織田信長の配下として戦った。小牧・長久手の戦い。若尾氏は織田信長の配下として戦った。小牧・長久手の戦い。若尾氏は織田信長の配下として戦った。	織田信長
1600年	徳川軍と戦った。若尾氏は徳川軍の配下として戦った。徳川軍と戦った。若尾氏は徳川軍の配下として戦った。徳川軍と戦った。若尾氏は徳川軍の配下として戦った。	徳川氏

若尾氏は武田氏の家臣で、大原・根本に拠点を置いていた。武田氏に代わって大原・根本を治めていた。武田氏に代わって大原・根本を治めていた。武田氏に代わって大原・根本を治めていた。

【図表3】授業で使ったワークシート



【図表4】多治見空襲の紙芝居

見市空襲」(図表4)を使ったほか、2018年に発行された鬼頭佳嗣著「多治見空襲を知っていますか?」の13ページに掲載されて

いる「多治見市が受けた空襲一覧」を使った。

多治見市空襲における主な被災地は、勤務する小泉小学校内のJR太多線小泉駅からJR多治見駅にかけての地域である。紙芝居の朗読中子どもたちは自分たちに馴染みのある地域での惨劇に、一言もしゃべらずに、じっと聞き入っていた。

表1 多治見市が受けた空襲一覧

日付	概要	被害状況
3月12日(月)未明	轟轟中に焼夷弾(しょうやだん)・火炎や高熱によって人を殺傷したり建物を破壊したりする爆弾)が投下された。現在の南側小学校の南側の田から太森山(たいたせん)裾野、東側の太森山にかけて火災が発生するが大きな被害はなし。歌合など数週間にも被害なし。焼夷弾の筒も太森山で回収したところりや一3杯分あった。	田と森林で小規模な火災が発生。被害なし。
4月22日(日)昼頃	P51D型が襲撃。数機不明。明野陸軍飛行学校と鈴鹿基地を攻撃目標とした米軍記録がある。そのうち多治見に襲撃した可能性がある。	岐阜県立多治見病院(以下、病院)を襲撃。記録されるような被害なし。
5月14日(月)午前11時頃	名古屋を空襲して電線に続くB29の大爆弾が多治見から見た。そのうち1機が多治見に落下され病院に落下した。小規模な火災が発生。	病院にて小規模な火災が発生。人的被害はなし。
6月26日(火)午前10時から午後10時35分までの間くらい	ヒューレーと軍用機が侵入。ドローンのように見えた。多治見(現JR太多線小泉駅)の山に降下して立てこもる状態に陥った。約100機の午前10時35分までの間くらい。名古屋と岐阜を空襲した米軍の記録があるが、各機空襲の時間が午前9時12分から16分までである。福岡に本土が落ちたことが知られる。	死者20名以上、負傷者数十名。正確な数はわからない。小泉駅前(現太田駅)の小泉駅前、小泉駅前、東家業、徳田、客車、多治見駅、多治見駅、朝日国民学校に火災や被害あり。
7月15日(日)午後1時過ぎ	P51D型4機による襲撃を受けた。詳細は、14ページの概要と第3章の被害者インタビューに記載。	小泉駅前(現太田駅)の小泉駅前、小泉駅前、東家業、徳田、客車、多治見駅、多治見駅、朝日国民学校に火災や被害あり。
7月24日(火)昼頃	土師川総合公園上流のまぎと池付近に水泳をしていた小学生たちがP51D型が襲撃。名古屋から襲撃してきていた小学5年生に命中して即死。事件につき少年たちは警察から取り調べられた。目撃者が複数いるが正確な情報が得られないことを防ぐため。	小学5年生の男子児童1名が首から腹にかけて貫通銃創を受けて死亡。
8月14日(火)午後1時過ぎ	小泉駅で客車が襲撃された。7月15日の襲撃を生かし、運転士の迅速な判断によって乗客を事前に避難させたことと人的被害なし。同じ頃、多治見駅でも東家業が襲撃された。P51D型が名古屋を攻撃目標とした米軍記録がある。その一機と推測。	機関車、客車、貨物列車、多治見駅。人的被害はなし。

【図表5】多治見市が受けた空襲一覧

覚的にも空襲が無差別殺戮の色合いが強いことが感じられる結果となった。子どもからは次のような意見が出された。

- C1: 多治見市が受けた攻撃は、全く軍事施設とか米軍を攻撃するような場所ではなかった。
- C2: 駅、小学校、病院などを攻撃しても意味がないのに、どうして攻撃したのか分からない。
- C3: どうして多治見市がねらわれたの?

こうした素朴な感想や疑問などから、戦争末期の空襲で、一般人や民間施設が多数被害に遭ったことを理解することができた。

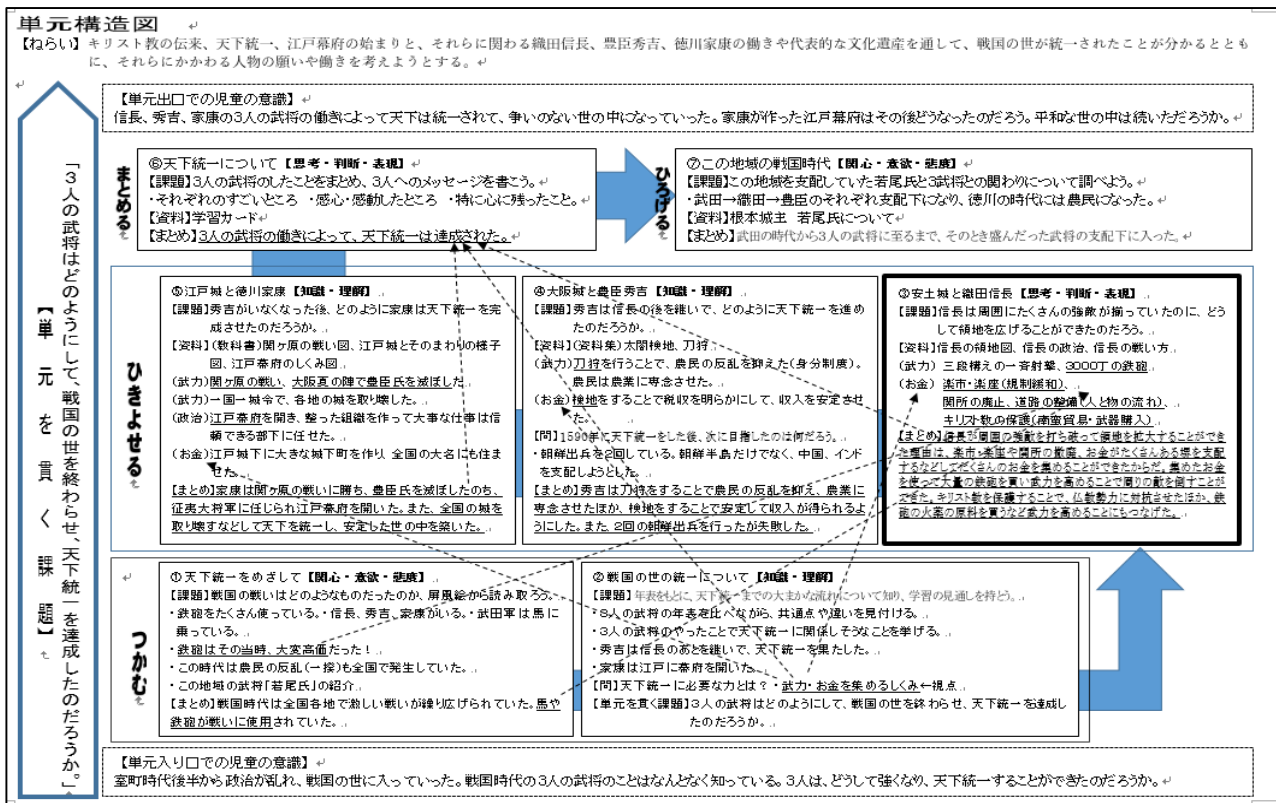
②身に付けさせたい社会的事象の見方・考え方を、位置付けた単元構造図の作成。

単元構造図(図表6)の作成にあたっては、単位時間の役割を明確にし、つけたい社会的な見方や考え方を明記したり、その見方や考え方がその後の授業にどう関連していくかを線でつないだりするなどの工夫をした。また、単元を貫く課題を設定し、毎時間の学習活動のまとめを、単元を貫く課題につなげるようにすることで、単位時間ごとの学習内容のつながりを意識できるようにした。「3人の武将と天下統一」の単元の場合、「3人の武将それぞれの働きにより、長く続いた戦国の世が終わり、天下統一が達成された。」ということが、子どもに捉えさせたい社会的事象であるので、単元を貫く課題を「3人の武将はどのようにして、戦国の世を終わらせ、天下統一を達成したのだろうか。」とした。

(1) 単元構造図における4つの段階

単元構造図を作成するにあたって、単元の展開に見通しを持たせるために4つの段階を設定した。1つ目が「つかむ」段階である。これは、社会的事象と出会い、単元の見通しを持つための授業である。「3人の武将と天下統一」の単元では、長篠の合戦屏風図を通して、戦国時代の様子をつかむ。日本中でこの合戦屏風図のような戦いが繰り返されてきたことを知り、それが3人の武将の活躍によって平和な世の中になったことを年表を使って確認することで、「3人の武将はどのようにして、戦国の世を終わらせ、天下統一をしたのだろうか。」という単元を貫く課題へとつなげた。また、校区内には若尾氏という武将がいたことを紹介し、3人の武将の盛衰とともに、どんな道をたどったのかを想像させるなどして、郷土に引き寄せて考えられるようにした。

2つ目が「引き寄せる」段階である。社会的な見方や考え方を高める段階である。この段階で、単元を貫く課題を解決するための土台となる社会的事象に対する見方・考え方(それによって獲得された新しい知識)を獲得する。「3人の武将と天下統一」の単元であれば、信長、秀吉、家康の3人の武将が、それぞれ戦乱の世を治めるために行っ



【図表6】単元構造図

た施策の内容と、その成果・影響を資料追究を通して知るのである。

3つ目が「まとめる」段階である。調べてきたことをもとに、単元を貫く課題への自分の思いをまとめるのである。この単元の場合、単元を貫く課題が「3人の武将はどのようにして戦国の世を終わらせ、天下統一をしたのだろうか。」なので、この課題に対する答えとなるようなまとめを、ここで書けるようにする。

4つ目が「ひろげる」段階である。単元で培った知識や社会的な見方や考え方をつかって、郷土の歴史を見つめたり、同時期の他の歴史的な事象について考えたりする段階である。

単元構造図を作成する際に意識したことが、3つ目の段階の「引き寄せる」での選択・判断を伴う学習活動に向かって、第1段階、第2段階のどの時間で土台となる知識や社会的な見方・考え方を学習するかを検討したことである。単位時間ごとに獲得する知識や社会的な見方・考え方を位置付けたら、次にその知識や社会的な見方・考え方を習得するために、どのような資料を用いるか、その資料で付けたい「見方・考え方」を明らかにしどの

ような課題設定と発問をすればよいかを検討する。

このように単元構造図を作成することにより、単元全体を、単元を貫く課題に向かった一つの意識でつなげることができ、単位時間の位置付けがより明確になった。

(研究内容2) 仲間や社会とつながる学習活動の工夫

①既習事項、資料と資料、仲間の意見をつなげることで、社会的な事象を多角的に考える学習活動。

単位時間の流れについても、3つの段階を設定することで社会に対する認識を広げたり深めたりする場を全ての児童が持てるようにした(図表7)。

課題追究の流れ	それぞれの段階のねらいと期待する姿
1. 個人追究	・課題解決につながる事実をできるだけ多く見つけ出す段階。 ・個人追究を通して見付けた事実を出し合い、お互いの持つ情報量の差をうめるとともに、集めた事実をつなぎながら、それぞれの社会的な事象の持つ意味について議論し始める段階。
2. 全体交流	・全体交流で出された事実を足場に、それぞれの事実が持つ社会的な意味や意義について、「深めの発問」を通して検討し、課題解決につなげる段階。

【図表7】課題追究の流れ

6月に実施した「織田信長と安土城」での実践を通して、課題追究における3つ学習活動の役割を説明する。

この授業ではわずか30年のうちに、尾張の小大名だった信長が、周囲の強力なライバルに打ち勝ちながら現在の中部・近畿地方一帯を影響下に入れていった事実を1560年頃と1582年頃の勢力図を対で示しながらつかませた(図表1)。そこから、学習課題を「なぜ、信長は周囲を敵で囲まれていながら勢力を広げていくことができたのだろうか。」とした。

子どもたちは、まずは個人追究を行う。子どもたちは課題解決に向けて与えられた資料を読み取りながら、資料から得た情報を根拠に自分なりの課題に対する考えをつくる(図表8)。



【図表8】個人追究の様子

そして、その後、その後全体交流を行う。個人追究では発見できなかった事実、見方、考え方を知ることができるようにして、全員が持っている土台となる情報量をそろえるのである。

子どもたちに提示した資料は3点。1点は経済振興策である「楽市楽座」「関所の廃止」「道路の整備」などの情報、2点目は戦術の先進性を示す「鉄砲による三段構えの戦法」を示すもの。3点目がキリスト教の保護政策のことである。子どもたちは全体交流を通して、各資料から考えたことを発表していった。

- C1: 関所を廃止したことによって、人や物が自由に移動できるようになって、安土城の城下町に大勢の商人が集まってきた。
- C2: 道路を整備したことによって、戦が起きたときに敵のところまでいく時間が短くなった。
- C3: (前時までの学習とつないで) 三段構えの戦法のために、大量の鉄砲が必要だった。大量の鉄砲を戦で使うことで、周囲の大名に勝てた。

以上は子どもたちの発表した内容の一部だが、

これらの意見は個々の資料から考えたもので、資料と資料をつないだり、仲間の意見とつないだりすることができていない。つまり、情報が点のまま存在しており、しかもその情報が課題解決の方向につながっていないということになる。ということは、それぞれの事実が持つ社会的意味についての認識が浅いままになっているということである。そこで、深めの発問を投げかけ、考える際の視点を与え、社会認識を深められるようにした。

まず、図表10にあるように、信長が行ったことを2つにグルーピングした。1つが「お金を集めるしくみ」、もう1つが「武力を高めるしくみ」である。グルーピングをしたところで、「お金をつくるしくみをつくるのが、どうして勢力を広げることにつながるのだろうか。」と問いかけた。



【図表9】グループ交流をする様子

この深めの発問が出たところでグループ交流を行った。そのねらいは、小集団で話し合うことで児童一人一人が自分ごととして考えなくてはなくなり、仲間の意見を積極的に比較・統合しながら課題に迫ることができるところにある。

図表9のように、4人グループにつき一枚のホワイトボードを渡し、このホワイトボードを囲みながら深めの発問に対する議論を行った。

このように、深めの発問を通して、子どもの意識が資料と資料をつなぎ、仲間同士で意見や考えをつなぎながら、課題解決に向かうことができた。今回取り上げた班だけでなく、9つある班全てが「稼いだ『お金』で、武器を買って『武力を高め』て周囲のライバルを打倒していった」という流れをつかむことができていた。



【図表10】「織田信長と安土城」の授業の板書

以上は6月の様子だが、その後もグループ交流を通して子ども同士がそれぞれ見付けてきた事実を比較・統合（つなげる）することで、社会的事象への理解をより多面的なものへと昇華させていくことができた。

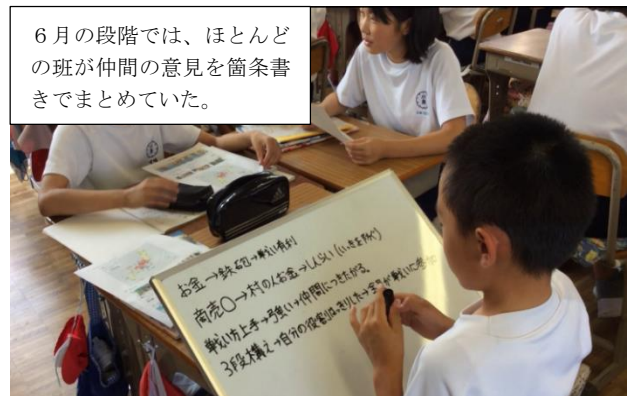
下の図表11は、12月に実践した「長く続いた戦争と人々の暮らし」の単元の第2時にあたる「中国との戦争が広がる」の授業の際、グループ交流で使用したホワイトボードである。課題は「日



【図表11】12月のグループ交流で使ったホワイトボード

本が中国と戦争することになった原因・展開・影響について考えよう」というものだった。

ここでは、個人追究→グループ交流という流れで展開をした。子どもたちはグループでの話し合いを通して、積極的にお互いの考えをつないだり、資料と資料を線をつないだり、キーワードをあげたりしながら話し合いをまとめている。6月時点



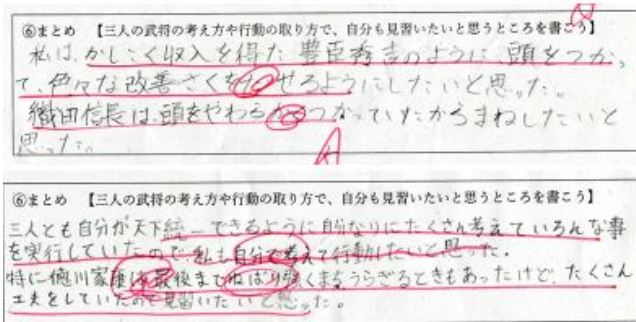
【図表12】「織田信長と安土城」のグループ交流の様子

のホワイトボードでは箇条書きをまとめている感じのものが多かった(図表12)ことと比べると、子どもたちにグループ交流のねらいが浸透し、小集団の話し合い中で個々が積極的に意見を表出し、それを積極的につなぎながら、話し合いを深めていくことができたと言える。

②社会的事象への自分の関わり方(つながり)を選択・判断する学習活動。

(1) 6月の「3人の武将と天下統一」での実践

「3人の武将と天下統一」の単元では、単元終末の授業で、この単元で学んだ3人の武将のそれぞれの業績についてまとめた。その後、「3人の武将の考え方で、自分も見習いたいと思うところはあるか」と問うことで、授業を通して知った3人の武将の生き方や考え方について再度考え、それを自分自身の生き方や問題解決への姿勢へとつなげていくような指導を行った。



【図表13】6月時点でのまとめの記述

上の図表13のように、3人の武将の生き方で見習いたかったり、あこがれたりする部分について記述させた。この児童たちのように、3人の武将の考え方や行動の起こし方について、自分の生き方や問題解決への姿勢につなげて考えることができる者は全体の3分の1程度だった。授業を通して得た知識の範囲でそれぞれの武将の考え方や行動の起こし方について論じさせようとする、その児童の興味・関心の度合いによって書く内容の差が大きく現れてしまう点が気になった。戦国時代に興味がある児童などは、それぞれの武将の様々な細かいエピソードまで知っているため、そうしたエピソードからうかがい知れる本人の人柄や考え方について書くことができる。その一方で、教科書の範囲の知識（情報量）では、生き方や考え方という抽象的なお題に対して明確な意見を持つことが難しい様子だった。単元末の「まとめる」のところで選択・判断させようとするならば、「つかむ」「ひきよせる」の段階で学習してきた知識を根拠にして考えることができるような問いにすべきと感じた。

(2)「長く続いた戦争と人々の暮らし」での実践

6月に行った「三人の武将と天下統一」での反省を踏まえて授業改善に取り組んだ。12月に実

践した「長く続いた戦争と人々の暮らし」の単元では、全7時間から構成される単元指導計画を立案した。この単元指導計画においては、単元を通して、日中戦争・太平洋戦争の2つの戦争の概要と戦時中の人々の生活、さらに、戦争末期の空襲、沖縄戦、原爆投下から終戦までを学習する。単元指導計画においては、

- ・戦争によって他国との関係がどう変化したか。
- ・戦争することになった背景（原因）。

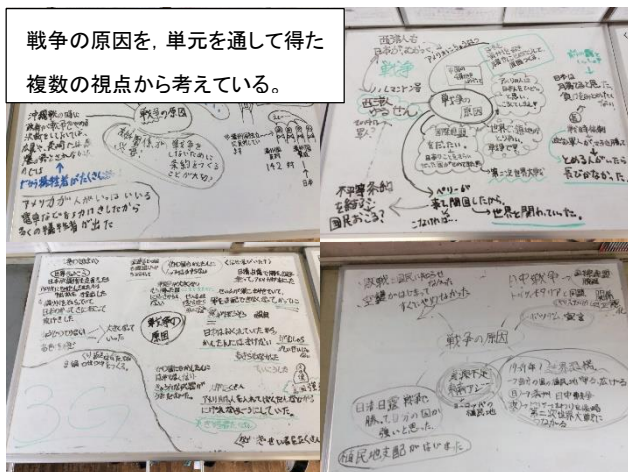
という2つの視点を軸に据えながら、歴史的事象を理解するようにした。

こうして獲得した知識を土台に、単元終末の第7時では「どうしてこれほどまでに多くの犠牲者が出る戦争が起きてしまったのだろうか。二度と戦争を繰り返さないためにはどうしたらよいのだろうか」という課題を立てた。この授業における「社会の在り方を選択・判断する学習活動」とは、戦争の要因となる事実、出来事をここまで学習してきた知識や仲間の意見を統合したりしながら検討することである。

0 まず、個人追究を行い、各自で単元を通して



【図表14】ホワイトボードを囲んで意見をつなげていく。



【図表15】グループ交流後のホワイトボード。

獲得してきた知識を根拠にしながら考察した。その後、個人個人が自分の意見を表出する機会を増やすためにグループ交流の時間を設けた。

グループ交流では、ホワイトボードの中央に「戦争の原因」と話し合いのテーマを記入し、それぞれの意見をできるだけ線や矢印で結びながら、仲間の考えをつなげて話し合いを深めていく姿があった(図表14)。また、図表15からもわかるように、学級内の全てのグループが互いの意見をつなぎながら、戦争の原因を議論できていた。全体交流では大きく次のような意見が出された。

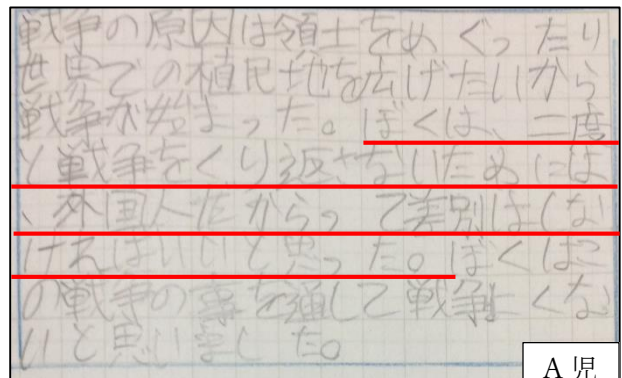
- C1: 世界恐慌からの不景気を回復するために満州を支配しなくてはならないという考えにとらわれすぎた。
- C2: 日本も欧米列強も自分の利益を優先しすぎて植民地の取り合いをしたことが戦争の原因になった。
- C3: 明治維新以来の富国強兵策によって、日清・日露などの戦争に勝つことができたけど、勝つ毎にエスカレートさせてしまったのではないかな。
- C4: 戦時体制の中で、戦争に反対できないようにしてしまい、大きな被害が出るまで戦争を続けてしまった。
- C5: 工業が発展したから、強い爆弾が作られ、それによって被害が大きくなってしまった。
- C6: 日本は資源が少ない国だけれど、その資源を武力を使って力尽くで奪おうとしたことが良くなかったのでは。
- C7: 満州事変の後、国際連盟に満州国の設立を反対されたときに脱退して国際的に孤立してしまった。国際連盟は平和を守る組織だし、そこから脱退することで戦争の道に突き進んでしまったのではないかな。

ここに挙げられた意見は、子どもたちが即席で思いついたものではなく、全て単元を通した各授業の中で得てきた知識であり、見方・考え方である。第7時の授業でのグループ交流や全体交流を通して、子どもたちが単元で得てきた知識が一つにつながったと言える。

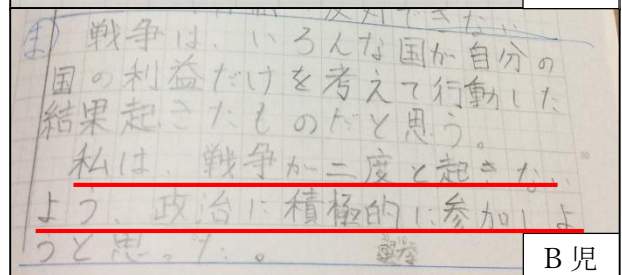
そして、この知識を土台に「二度と戦争を繰り返さないためには、どうしたらよいのだろうか。」という発問をしたところ、次のような意見が出された。

- C1: 外国との友好関係を結ぶことが重要だ。
- C2: 外国人に対する差別などをせず、仲良くすることが大事だ。
- C3: 国際連盟のような、平和のための組織を作ってそこに入ることだ。
- C4: 資源を武力で奪い取るのではなく、対等な貿易を通して手に入れるようにすればよい。
- C5: 植民地の取り合いが戦争の原因の一つになっているので、どの国も植民地支配をしなればよい。
- C6: 原爆などの核兵器を持たない。
- C7: 戦時体制のところでは政党を解散してしまい、国民の声を聞かなくなってしまった。戦争に反対する国民の声を聞くようにしなくてはいけない。

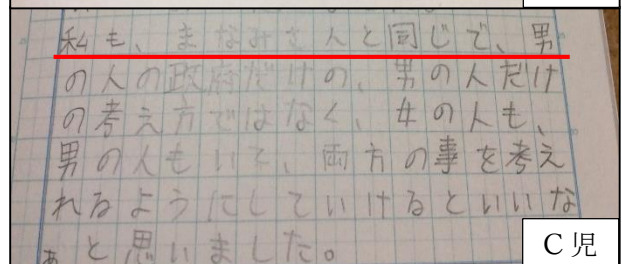
これらの意見は、前段の「戦争が発生し、長引き、多くの犠牲者を出してしまった原因」の反対の道考えたものである。これらの意見の一つ一つはそのまま、戦後の日本の民主化、平和主義、非核三原則、国際協調外交といった現代に続く日本の歩んできた道につながるものである。以下は授業後のまとめである。(図表16)



A 児



B 児



C 児

【図表16】授業後のまとめ

A児はまとめの中で植民地の取り合いが戦争の一番の原因と捉え、それを繰り返さないためには「外国人だからって差別をしなければいい」と考えるなど、自分の在り方につながるまとめになっている。B児は戦争が長く続いてしまった遠因として、戦時体制の中で戦争に反対する国民の声が届かなかったことを念頭に置きながら「私は戦争が二度と起きないよう、政治に積極的に参加(選挙)していきたい。」と、政治参加への意志を書いている。C児は「わたしもまなみさんと同じで・・・」と授業中に出された仲間の意見につなげながら、よりよい社会の在り方について考察している。

このほか、多くの子どもが戦争の原因を複数の要因をつなげてまとめ、そして戦争を繰り返さないためにはどうしたらよいかについて自分なりの意見を書くことができていた。

(研究内容3) 指導・援助の工夫

① 社会とのつながりに気付く「3つの見届け」

単位時間における学習過程に合わせて、「願う子どもの姿(見届ける姿)」を明確にし、「実態」「学習状況」「定着状況」の3つの見届けを大切にしたい。

1つ目は「実態の見届け」である。前の時間に書いた「まとめ」をチェックすることで、本時につながる知識をどの程度理解しているかを把握したほか、授業の冒頭に社会科系の児童が実施する復習クイズでの挙手や解答の状況から児童の持っている知識を把握するようにした。

2つ目は「学習状況の見届け」である。授業中の課題追究の様子を机間指導しながら個々の子どもの思考の進捗や内容を確認した。課題解決につながる事実を発見したり、考察したりしている児童には赤ペンで丸を付けるなどした。

「定着状況の見届け」は、単位時間の終末にまとめとふり返しを行うことで、児童の課題達成の度合いや定着状況を把握できるようにした。

② 仲間の考えにつながるための学習環境の工夫

(1) ホワイトボードの活用

仲間の考えにつながるための工夫として、小集団による話し合いを行う際に、ホワイトボードを

使うようにした。ホワイトボード上にグループの書記係が意見をまとめていくことで、仲間との対話で生まれた思考の過程を可視化し、議論を深めていけるようにした。

また、交流の際にホワイトボードを提示しながら話すことで、考えの根拠を示したり、流れを可視化したりすることで全体交流での議論がより深まるようにした。(この成果については、図表13と図表14を参照のこと。)

6. 成果と課題

- 単位時間あたりに付けたい社会的な見方・考え方、知識を明確に位置付けた単元構造図を立案することは、子どもにそれらの力を付ける上で有効であった。
- 社会的事象を見方・考え方を鍛えるためには、単元の終わりに、その前の時間までに獲得した知識や見方・考え方を使って問題解決を図れるような話し合い活動を計画すると有効であることが分かった。
- 必然性のある問いかけや、小集団による話し合い活動(グループ交流)を毎時間の中で位置付けた指導を行うことで、歴史的な事象を捉えるための複数の事象を「つなげ」たり、仲間の意見を「つなげ」たり、自分の生活経験と「つなげ」たりしながら、より深く、より広く多角的に社会的な事象を捉えることにつながった。
- 個人個人の学習状況の見届けについては弱い部分もあると感じている。それぞれが、単位時間内の自分の学習内容についてきちんと振り返ることができるような学習カードを作成するといった取り組みも今後は増やしていきたい。

(参考文献)

- 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編 文部科学省
- コンピテンシー・ベースの授業づくり 奈須正裕・江間史明ほか 図書文化
- 第60回指導と評価大学講座講義資料 無藤隆、奈須正裕、田村学ほか 一般社団法人日本図書文化協会
- 「多治見空襲を知っていますか？」 鬼頭佳嗣著 パレード